

平成21年6月12日現在

研究種目：若手研究（B）  
 研究期間：2007～2008  
 課題番号：19730548  
 研究課題名（和文） 優れた授業実践技量の継承と発展を目指した国語科教師の授業研修プログラムの開発  
 研究課題名（英文） Development of In-service Japanese Language Teacher Training through Making Use of Excellent Teacher's Practical Knowledge  
 研究代表者  
 丸山 範高（MARUYAMA NORITAKA）  
 和歌山大学・教育学部・准教授  
 研究者番号：50412325

研究成果の概要：本研究の目的は、国語科教師による、他の教師の優れた授業力を活用しながらの、授業改善に向けた研修のあり方を提示することである。研究の方法として、全国各地で優れた授業を実践している、高等学校国語科教師を対象とした聞き取り調査を行い、各教師のライフストーリーを解釈し、授業実践を通して培ってきた経験知の概念化を試みた。優れた国語科授業は、授業技術を豊富に持っていれば実現できるものではない。優れた国語科授業を実践する教師は、常に、教材・学習者・教師自身の個性と、それらの相互関係といった、授業という状況の全体を見極め、多種多様な授業技術を有機的に引き出しながら学習者の学びを高める働きかけを重ねていることが明らかになった。

## 交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	500,000	0	500,000
2008年度	300,000	90,000	390,000
年度			
年度			
年度			
総計	800,000	90,000	890,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：国語科教育・教員研修・授業改善・ライフストーリー・教師教育

## 1. 研究開始当初の背景

授業研究は、教師にとって外在する普遍的・効率的な指導プログラムの開発に関する授業技術研究から、「反省的实践」をベースとする、教師の「知識」「思考」に関わる教師研究へ転換が図られている。(佐藤：1999) こうした中で、国語科教育の領域においても、澤本他(1996)・藤原(2000)・藤原ら(2002)(2004)・細川(2005)らにより、国語科

授業実践場面において教師の内面に生ずる実践的認識に関わる研究成果が蓄積されている。これらの研究は、授業という個別具体的な場面に着目し、その個別具体的な場面で機能する教師の思考判断の内実とそれによって現象した授業との関係を明らかにした。しかしながら、いずれの研究も、教師の優れた授業力の、他の教師との共有や分有を図るというものではない。わずかに、藤原(2002)が、

「典型性」という概念を提示することによって、他の教師に及ぼす実践的意味について言及し、細川(2005)が、他の教師の「フレーム」との比較検討により自己の「フレーム」の発達について示唆を与えている程度である。つまり、ある教師の力量が別の教師へ継承・発展される具体的様相についての研究は未だ行われていない。筆者による教育実習生を対象とした研究(丸山：2004)(丸山：2005)においても、授業観察における問題点や授業改善に向けた自己省察のあり方を明らかにしたものの、他の教師の優れた授業力を取り入れた力量形成に向けた研究については未着手の状態である。

一方、国語科教師の研修プログラムに関する研究としては、中谷・前田ら(2003)のものがあるが、自己の授業力の診断に基づく研修にとどまり、他の教師の優れた授業力を取り入れた研修プログラムとはなっていない。

#### 【引用文献】

- 佐藤学(1999)「カリキュラム研究と教師研究」(安彦忠彦編『新版カリキュラム研究入門』勁草書房 pp. 161-169.)
- 澤本和子・お茶の水国語研究会編(1996)『わかる・楽しい説明文授業の創造—授業リフレクション研究のスズメー』東洋館出版社
- 藤原顕(2000)「教師のカリキュラム経験—実践的知識の形成と教師の成長—」(グループ・ディダクティカ編『学びのためのカリキュラム論』勁草書房 pp. 63-81.)
- 藤原顕・遠藤瑛子・松崎正治(2002)「遠藤瑛子実践における単元生成の文脈—国語科教師の実践的知識へのライフストーリー・アプローチ—」(全国大学国語教育学会『国語科教育』第52集 pp. 48-55.)
- 藤原顕・荻原伸・松崎正治(2004)「カリキュラム経験による国語科教師の実践的知識の変容—ナラティブ・アプローチを軸に—」(全国大学国語教育学会『国語科教育』第55集 pp. 12-19.)
- 細川大輔(2005)「国語教育におけるアクション・リサーチの可能性—実証主義からのパラダイムの転換を—」(全国大学国語教育学会『国語科教育』第58集 pp. 34-41.)
- 藤原顕(2002)「国語科授業研究の方法論」(全国大学国語教育学会『国語科教育学研究の成果と展望』明治図書 pp. 476-477.)
- 丸山範高(2004)「国語科教育実習生が行う授業観察の視座に関する一考察」(広島大学附属中・高等学校『研究紀要』第50号 pp. 1-9.)
- 丸山範高(2005)「授業リフレクションでの問題解決に関する一試論—国語科教育実習生の場合—」(広島大学附属中・高等学校『中等教育研究紀要』第51号 pp. 1-8.)
- 中谷雅彦・前田真証他(2003)『教師の国語科

授業力を自主的に伸ばさせる研修プログラムの開発に関する研究』科研中間報告書

## 2. 研究の目的

本研究は、国語科教師が授業改善を試みながら授業力の向上を図る教員研修のあり方の提示を目的とする。なかでも、高等学校国語科における「読むこと」の領域の授業改善について、他の教師の優れた授業力を生かした研修のあり方に焦点を絞って研究を進めた。

中教審「新しい時代の義務教育を創造する」答申(平成17年10月26日)では、教育の質の保証・向上に向けた、優れた教師の資質の一つとして授業作りの力量が指摘されている。そして、研修のあり方として、「教師の優れた指導実践を蓄積し、他の教師に継承していくことで、教師全体の指導力の向上を図る」方策の検討が必要とされている。

なお、本研究は、全国各地で活躍する高等学校国語科教師の優れた授業力を普遍化・画一化し、その力量を、研修に臨む多くの教師たちに一方向的に継承させることを目的としたものではない。本研究のねらいは、他の教師の優れた授業の取り込みを図るものであるが、あくまで、個々の教師が自分の個性に合った形に調整しつつ取り込むことを意図している。そこでは、授業改善を望む国語科教師が、自己の授業の課題領域を発見し、その改善方策を自己の授業固有の状況の中に位置付けつつ模索しようとする志向性を生み出す手がかりを、他の教師の優れた事例を紹介することによって、提供しようとするものである。

そのため、優れた授業力の概念化にあたっては、発問や指示・説明の仕方といった、いわゆる授業技術の抽象化だけにとどまらないように留意した。優れた国語科授業が実践されている状況の全体をできるだけ詳細に具体化した。そして、その状況の中で、学習者に対して授業者がどのような働きかけを行い、その場面で、授業者は何を考え判断していたのかを明らかにした。こうすることで、研修に臨む教師は、自己の授業の状況とのつながりを意識しつつ、他の教師の事例を活用することができるはずである。

## 3. 研究の方法

本研究は、国語科授業改善に向けた教員研修のあり方を提示するものであるが、あくまで優れた授業を実践している国語科教師の経験知の継承を意図したものである。

教師の経験知を概念化するにあたっては、現実の授業で出合った様々な出来事を、当該教師が意味付けつつ構築した語りを通してアプローチするという研究方法が適している。なぜなら、個々の教師固有の個人的経験

を基盤とする経験知は、主観的要素が強くなるからである。そこでは、「事象間の因果関係の理解にかかわる「論理—科学的思考」と対置される、人間の行為の意図や出来事の意味の解釈にかかわる認知様式」(藤原：2004)によって物語言説が引き出される必然性を持つ。さらに、教師の語りによって迫ることができる研究対象として「教師がそれまでの経験をふまえつつ、ある授業の構想と実践に込めている意図や判断」(藤原：2007)が取り上げられていることから、教師の語りを通して経験知を明らかにするという方法は妥当であると考えられる。

本研究では、全国各地で活躍する高等学校国語科教師を対象に、国語科「読むこと」の領域の授業についてインタビュー調査を行い、そこでの教師の語りをもとに当該教師の経験知の記述・解釈を試みる。その際、ライフストーリー・インタビュー法を採用する。

ライフストーリー研究における「語りは過去の出来事や語り手の経験したことというより、インタビューの場で語り手とインタビュアーの両方の関心から構築された対話的混合体にはかならない」。したがって、ライフストーリー・インタビューには、語られた「出来事の経過や登場人物の考えや行為のなかに、語り手とインタビュアーの解釈がふくまれて、ひとつのまとまりをもった語りが構成される」という「ライフストーリーの物語的構成」という特質がある(桜井：2002)。そして、この「ライフストーリーの物語的構成」について、「語りには、プロットで構成される〈あのとき—あそこ〉の物語と〈いま—ここ〉のインタビュー過程をわけるフレームが存在している。〈いま—ここ〉ではたされる主要な機能は物語に対する〈評価〉であって、「語られた物語の意味と語りの理由や動機を表す」。「この二つの位相をふくむ全体がライフストーリーの語りなのである」と説明している(桜井：2006)。こうした、ライフストーリー研究の特質は、本研究で構築された語りの性質に合致する。理由は、現時点から、当該教師の過去の優れた授業実践に基づく経験知を解釈・評価するという質問者(筆者)の意向に沿った文脈のもとで、当該教師の経験知に関わる語りを回答者と質問者によって協同構築するからである。

#### 【引用文献】

- 藤原 顕 (2004) 「物語論」(日本教育方法学会『現代教育方法事典』図書文化社 p. 62.)  
藤原 顕 (2007) 「教師の語り—ナラティブとライフヒストリー」(秋田喜代美・藤江康彦編『はじめての質的研究法 教育・学習編』東京図書 p. 337.)  
桜井 厚 (2002) 『インタビューの社会学—ライフストーリーの聞き方』せりか書房

pp. 30–31. p. 34.

桜井 厚 (2006) 「ライフストーリー・インタビューの意義と方法」(『言語』第35巻第2号 大修館書店 p. 62.)

#### 4. 研究成果

##### (1) 蹉跎経験を克服することによって獲得した国語科教師の経験知

ここでは、優れた国語科授業(「読むこと」の領域)を実践している、ある高等学校教師(A先生)の経験知の事例を紹介する。A先生は、初任時のつまづきを克服していく中で、学習者の「読むこと」の学びを高めることのできる、授業実践に関わる経験知を育んでいる。

A先生は、初任時において、個々の学習者の学びに寄り添った授業を実践できていなかった。当時の授業は、教師が発問し学習者が応答するという形態になっていたものの、教材文に背を向ける学習者がいるなど、学習者の「読むこと」に関わる学びを引き出すのは容易ではなかった。ところが、現在は、初任時の蹉跎経験を克服し、学習者の学びに寄り添った形で発問・指示・説明がなされるようになってきている。先生は、自ら教材文に関わろうとしない学習意欲に乏しい学習者に向き合った蹉跎経験から「自発的に教材文を読ませる」ための知識を獲得したり、特定の学習者との対応に終始し教室全体の学習者を巻き込んでの授業展開ができなかった蹉跎経験、および、教師の読みに学習者を囲い込もうとして円滑に授業が展開できなかった蹉跎経験から「学習者の読みを交流させる」ための知識を獲得したりしている。現在の先生にとって、これらの経験知はそれぞれ、授業実践の基本として位置付けているとともに、両知識が相互に循環するという知識相互の関係性も構築されている。

A先生以外にもインタビュー調査を実施したが、優れた国語科授業を実践している先生の経験知は、いずれも、個々の教室における1人ひとりの学習者の学びの実態を見極める中で経験知として体得されていることが明らかになった。

##### (2) 研究授業に関わる経験を通して獲得した国語科教師の経験知

国語科教師が研究授業(授業公開と授業批評会)に関わる経験を契機として、国語科「読むこと」の授業における教授方略について、同僚教師の批評をどのように受容したかを明らかにした。

インタビュー調査の結果、同僚教師の批評の受容の仕方は、個々の教師によって異なる側面と、国語科教師として共通する側面とが見出された。

同僚教師の否定的な批評を受けて自らの教授方略の有効性について葛藤する教師、同僚教師の批評を取り入れることによって自らの教授方略の不備を補充する教師、同僚教師の肯定的な批評を受け入れることによって自らの教授方略を強化する教師など、さまざまに研究授業経験を位置付けていた。

一方、どの国語科教師も、国語教材文の意味理解の充実を図るという共通する志向性をもって同僚教師の批評を斟酌するという共通性も見出された。

### (3) 他の教師の経験知を活用した授業改善に関する基本的な考え方

本研究で目指す、他の教師の経験知を活用した授業改善とは、研修に臨む教師が、本研究で取り上げたモデル教師の授業技術を、自分の授業にストレートに適用するという方向を目指すものではない。授業改善を志す教師1人ひとりが、勤務する学校・子どもの実態を見極めながら、モデル教師の力量の具体を省察の手がかりとしつつ、自己の授業の問題点を発見し、授業改善を図るというスタンスを目指している。

このようなスタンスを取る理由は、本研究がライフストーリー・インタビューの語りを研究対象としているからである。ライフストーリー・インタビューの語りは、事実そのものを記述したものではない。そして、事実そのものの記述になり得ないライフストーリー・インタビューの語りは、「個々の出来事は同じでも、それをどのようにむすびつけるかによって、物語が変わり」、「自分自身(中略)を主体的に生成的に変えていく知恵としての〈もの見かた〉や〈方法論〉」を得ることを可能にするのである(やまだ:2005)。

したがって、本研究で取り上げたモデル教師の語りは、授業実践の事実そのものを提示したのではなく、授業実践の事実を成り立たせるための授業実践知に関わった、個々の教師固有のもの見方を提示したものとなる。ここでは、研究の成果としての普遍性、妥当性、汎用性が問題となる。しかしながら、モデル教師の語りを記述、解釈することの意義は、法則化された授業技術の抽出にあるわけではない。本研究における研究成果は、授業改善を志す他の教師が自分の授業を省察するための視座の提供という観点からとらえていきたい。つまり、モデル教師の事例を活用して授業改善を図る教師は、モデル教師の授業技術をそのままの形で自分の授業実践に活用するというスタンスで授業改善に臨むべきではない。単なる授業技術の“あてはめ”ではなく、授業技術を取り巻く背景世界の厚みとその内部構造の緻密さに思いをいたし、自分固有の授業実践知の獲得に向けた省察活動の手がかりとして、本研究の成果

を活用できるのではないか。

優れた授業を実践していくための経験知が概念化され、他の教師が参照可能になることによって、たとえば小規模校に勤務する初任教師など、先輩教師の授業力に触れる機会の少ない教師たちに対して、他の教師の優れた経験知を手がかりとした教員研修が可能となる。これまでの授業改善に関わる教員研修では、他の教師が関わる場合であっても、授業参観者として授業改善のための印象的批評をするにとどまるか、他の教師が作成した教材や授業展開技術など表面的な技術を自己の授業に半ば強引にあてはめるにとどまる研修がほとんどであった。本研究は、事例としての教師の経験知を、教師の個性と子どもたちと教材との関係性をも含めた個別具体的な状況性のもとで措定した。したがって、本事例を参照しつつ授業改善に臨む教師たちは、抽象化した授業技術のみに注目することはないであろう。学習者・教材・教師で構成される授業という場全体の状況を見つめる目を養いつつ、授業改善に励むこととなる。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

- ① 丸山範高「国語科教師が持つ授業実践知の習熟過程に関する事例研究」『和歌山大学教育学部紀要—人文科学—』査読なし、59巻、2009年、pp.1-9.
- ② 丸山範高「高等学校国語科一教師の実践的知識の成長過程に関わる事例研究—授業経験知の語りの分析を通して—」日本教育実践学会『教育実践学研究』査読あり、10巻2号、2009年、印刷中
- ③ 丸山範高「現職国語科教師が理想とする、経験知としての授業実践知の特質に関する事例研究」和歌山大学教育学部附属教育実践総合センター『教育実践総合センター紀要』査読なし、No.19、2009年、印刷中

〔学会発表〕(計2件)

- ① 丸山範高「国語科教師の授業実践技量の特質」第113回全国大学国語教育学会岡山大会、2007年11月3日、岡山市
- ② 丸山範高「研究授業に関わる経験によって導かれる国語科教師の専門知の内容」日本教科教育学会第34回全国大会、2008年12月7日、宮崎市

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

○出願状況（計0件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

○取得状況（計0件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

丸山 範高 (MARUYAMA NORITAKA)

和歌山大学・教育学部・准教授

研究者番号：50412325

